

生命保険商品の価値を保全する金利ヘッジ方法の検証

服部真*

ポウヤン・ジャハニ†

ケイトリン・ジョウ‡

2018年10月12日投稿

概要

日本の金融市場では20年以上の期間にわたり低金利が継続している。また金利上昇期における契約者の金利選好的な動的解約行動を想定すると、将来の金利の上昇が必ずしも生命保険契約の収支の改善に寄与するとも限らない。このような状況下、生命保険契約の価値を金利ヘッジの手法を用いて有効に保全できるかを、確率論的シミュレーション手法を使って検証した。生命保険業界における金利に対する動的解約の経験値は十分ではなく、定量的なモデルの特定は困難だが、契約者の解約行動が金利の動向に非常に敏感であると仮定しても、今回の検証によって、金利ヘッジ方法は有効に機能したと判断する。ただし、解約返戻金の形状に従った解約行動に例を見るような、金利の変動に連続的には連動しない解約行動が予想される場合、その有効性は劣後すると予想する。HPC（ハイ・パフォーマンス・コンピューティング）のシステム環境下における確率論的シミュレーション手法を用いた今回の検証方法は、金利ヘッジ政策だけではなく、広く生命保険会社のALM政策の事前検証に有効に機能すると考える。

キーワード：潜在価値の保全、金利ヘッジ、金利バケット、確率論的シミュレーション、ハイ・パフォーマンス・コンピューティング

1 はじめに

日本の金融市場は20世紀の末より今日まで、20年以上の期間にわたり低金利が継続している。この1年間には上昇の兆しが見えたものの、将来の動向は予断を許さない。しかも、金利上昇期における契約者の選好行動を想定すれば、金利の上昇が必ずしも生命保険会社の経営に肯定的に影響するとも言い切れない。生命保険契約を保有する保険契約者は高金利環境下で提供されるより高金利の金融商品や、自己の保有する生命保険契約を提供している生命保険会社によって新たに販売される高金利生命保険商品に乗り換える傾向があると想定されるからである。これにより日本の金利環境の動向は、上昇・下降ともに、生命保険会社の経営に不確実な影響をもたらすと想定される。

保険契約の価値の保全は、生命保険会社のリスク管理の要諦であるが、以上のようにこの価値は市場金利の動向に左右さる。本報告は、金利ヘッジの手法を用いることでこの価値を有効に保全できるかを、確率論的シミュレーション手法を使って検証したものである。

*エーオンバンフィールドジャパン株式会社 〒100-0014 東京都千代田区永田町2丁目10番3号

†エーオンセキュリティーズ、パスワイズ・ソリューションズグループ

‡エーオンセキュリティーズ、パスワイズ・ソリューションズグループ